

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2016年4月30日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川区陣場
 下41 盤オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 専務理事 大瀧 久治 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

厚労省で未送還事業を担当している部門では、2～3年に一度、職員が総入れ替えになるので、4月7日、引継ぎと初顔合わせも兼ねて岩渕会長、大瀧専務、花岡事務局長3名が厚労省社会・援護局を訪問しました。H27年度未送還事業の報告書類どっさり一式を説明しながら提出…（実は戦史館が提案して改善してきたことの1つ1つが、担当者が替わるたびにちゃんと引き継がれるよう、その場で毎回念押ししているのです）。

事業の27年度の収入は、事業委託費22,610,880円、銀行利息 720円、支出18,469,922円 収支差額は 4,141,678円でした。厚労省では3カ月かけて領収書1枚1枚を点検し金額の修正がなければ差額残金を国庫に返納することになっています。会議の後半は、H28年度事業計画書、事業予算書を提出し、今後の進め方を協議しました。当初は、未送還事業は27年度で終了すると聞いていたのですが、新法人が設立され指定法人として実際に稼働するまでの空白期間を作らないために、急きょ2月末に未送還事業の公募が発表されました。インドネシア方面は、これまでの実績がある戦史館の企画書が採用されました。

H27年度の未送還事業は道なかばで頓挫、日本インドネシアの遺骨帰還覚書も失効！

パプア州（西部ニューギニア方面）の遺骨帰還は、戦史館の働きかけで1999年に再開されて以降、遺骨収容団は14回派遣され、1568柱が帰還しています。特に昨年度は70年という節目で、年度内に2回遺骨帰還ができるようにしたい…これまで到達できなかった地域をカバーしたい…と未送還事業総仕上げのつもりでした。スピオリ方面ではムサキ島、アイブラボンディ島へ。ビアク島ではマリエンディ村、マンドゥ村、東洞窟、アンジャレウ村、アムブロベン村へ。ジャヤプラ方面ではプアイ村、ベラップ村、ゲニム村、アベパンタイ国境近くのモッソ村へ。サルミ方面のアルモパに入りました。

しかし10月、スピオリ方面から、概数 120柱が帰還できるはずが、ジャカルタの日本大使館の失態で遺骨帰還が延期となり、現地に仮安置されたままになったことは皆さんご存じのとおりです。ゼロ柱で帰還するという失態は今回で2度目。それならば、同じ年度内で2月に遺骨帰還を予定しているプアイ村からは何としても帰還させたい…と11月の未送還事業はプアイ村で準備を重ねて帰国。すると何と『日本とインドネシアの遺骨収容と帰還に関する覚書』協定が11月で失効してしまったというのです。国際協定をただただ失効させてしまうお役所!! お役人の仕事って何?? パプア州での覚書協定が失効したことで未送還情報収集も、年度内の遺骨帰還は2回とも、消失してしまいました。

日本とインドネシア 遺骨帰還 覚書とは？

かつてパプア州からの遺骨帰還は、派遣日程が組まれてもインドネシア政府の許可が下りず、度々延期されていました。その理由の一つが「50年以上インドネシアの地に留まっているものは“文化財”としてインドネシアに帰属するので持出し不可」というものです。

次頁へ続く

2012年3月の政府派遣で遺骨が帰還できなかったことから、両国が真剣に取り組み、教育文化大臣の「日本兵の遺骨は考古学研究の対象となる文化財ではない。遺骨収容は人道上の問題である」という見解で決着しました。続いて2013年11月20日、ちょうど遺骨収容団の派遣に間に合ってパプア州の遺骨収容と帰還についての覚書が締結され、2012年ビアクから帰れなかった遺骨と、その後に収容された遺骨を合わせて、282柱が帰還できました。

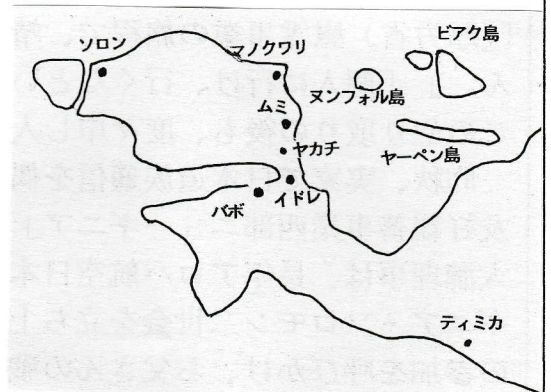
覚書は2年毎 両国の合意で延長されるはずですが…

教育文化省からは「地元の自治体や州政府と協議する時間が必要」という返事が繰り返されるばかりです。インドネシア中央政府は、パプア州の独立運動対策に大幅な自治権を認めたが、それ以上は関わりたくないという姿勢。パプア州ビアク市は「日本政府は約束を守らない」と主張する。ではどんな約束をしたのか日本大使館に尋ねると「ビアクからいろいろ要求は来るが、何も約束していない」と回答してきます。ビアク市の前観光課長ウォスパクリック氏は「日本大使館へ陳情に行って、イワブチさんにも経済協力について相談している…と言うと大使館の人が『何か要求があれば岩渕さんでなく直接私どもに言ってください』と言われたよ」と笑います。日本大使館は、ビアクの前市長（現在は汚職で逮捕され服役中）と組んで稲作事業を支援して失敗しているので、それを指摘する岩渕が苦手なのかもしれない…。

パプア州への渡航が許可されないで“覚書対象外”西パプア州の調査を提案した。

厚労省も「西パプア州は、これから遺骨帰還の覚書締結に向けた足がかりの調査が必要であり、ジャカルタではパプア州の覚書の再締結の協議も視野に入れたい」と積極的に動き、2月中旬に2週間の予定で未送還第5次派遣の岩渕と同じ行程で、厚労省・大使館職員もマノクワリ、ビントニ湾、イドレ、ヤカチ方面調査の計画を立てました。

西パプア州の州都はマノクワリ。昭和18年11月マノクワリに上陸した2万人の日本陸軍は、たちまち食糧不足に陥り、イドレ方面に9千人の転進命令を出しました。密林の中、ムミ、ヤカチを経てその先のイドレまで、地図で直線距離2百kmを南下して自活せよ、という命令です。50万分の1の地図で密林は白紙、地勢も高低も無視した命令、この無謀な行軍で屍が累々…後続部隊の道しるべは屍だったと記録されています。マノクワリからの帰還遺骨は1999年の12柱だけです。



今年2月上旬、イドレ、ヤカチ方面の第5次調査の準備をしながら胸騒ぎがしました。何事もなく出発できるだろうか？教育文化省が又イチャモンつけて来るのではないかと？インドネシア外務省は「西パプア州は覚書の対象外なので関知しない」として訪問を認めたと聞いていました。ところが出発3日前の夕方、厚労省からドタキャンの電話。ジャカルタの日本大使館によるとインドネシア教育文化省が難色を示したというのです。その理由は「インドネシア側の調査が済んでからでないと日本の調査は認めない」というもの。大使館は遺骨帰還による“危険物の除去”メリットをちゃんと伝えているのでしょうか？

(委託事業最後の年) H28年度未送還情報収集 始まる

未送還遺骨情報収集事業がもう1年延長されることになりました。新たな法律の施行で設立される「新法人」という容れ物の形や大きさが見えて来ないこと、その容れ物の中で何をどのように進めるのか？ 8年間で成果を上げられるか？ 国内で不安だらけなのに戦史館会員が長年、見守ってきたインドネシア方面…パプア州、西パプア州で、外交交渉がどのように展開されるのだろうか？ とますます混迷さが増すばかり。しかし今、目先にあること、できることを1つ1つ、一步一步進めていくしかありません。

H28年度事業計画予算は22,581,720円です。27年度は約2261万円、26年度は2054万円。5月には厚労省と戦史館で契約書を交わし、6月からは実質的に動き出す見込みです。

しかし、日本とインドネシアとの遺骨帰還に関する覚書が、いったん失効してしまったので、再度締結されるまでは情報収集目的の未送還事業でも入国することはできません。現地へ行けない間、仮安置されたままの遺骸が、盗難にあったり災害で流されたりしないよう、管理を継続してもらうために手を尽くすしかありません。

①海外情報収集のための派遣はインドネシアとの覚書が再締結される（であろうと期待して）今年度後半にずれ込んでも、5回程度は派遣できるよう準備しています。いずれも、派遣地域はパプア州限定なので、西パプア州ヤカチやマノクワリ方面は調査対象外です。

☆海外情報収集派遣の団員募集！詳細は未定ですが、記録係、インドネシア語通訳者など参加ご希望の方は戦史館までお問い合わせください。

②今年度前半に、インドネシア関係者向けに配付する資料、パンフレット等を作成する計画です。資料の主な内容は、遺骨帰還について理解を深めてもらうための関連教材です。

☆資料づくりに参加ご希望の方は戦史館へお問い合わせください。

③国内情報収集…帰還者訪問…現地から復員された方からお話を伺い、資料と照合しながら日本兵の遺骸が仮埋葬された可能性のある場所などを地図に落とし込む作業です。

☆西部ニューギニア方面からの帰還者についての情報、あるいは現在パプア州へ進出している企業やNGOで、日本兵の遺骨情報をお持ちの方、戦史館まで情報をお寄せ下さい。

H27年度の帰還者訪問～三好正之さんに今年度も現地情報の聞き取りを継続中～

3月8日、西部ニューギニア、サルミ方面から帰還された軍医の三好正之氏を訪問しました。三好氏は山口県在住、1917年生まれ99歳。阿智須共立病院の大先生として今も現役医師。（写真左：正之氏、中央：長男で同病院院長の正規氏、右：岩渕）ニューギニアから

奇跡的に生還した三好氏は、戦後は地域医療の最前線でも戦い続け、その姿は中田整一氏の著書『戦場の聴診器』に詳しく書かれています。

これまでにサルミ方面から寄せられた情報…収容された遺骸は、トル河上流地域と海岸地区の一部ですが、奥地は手つかずの状態でトル河を渡った後の“白骨街道”と呼ばれたルートの詳細は特定されていません。今年は復員70年の節目です。

